

保育のなかの

静寂

——二十一世紀に残したいもの——

荒牧 富士子

保育のなかの静寂、わたくしたちのなかの静寂、しきりにこのごろこのことを考える。静かに静まりかえって寂しいまでに何の音も体のなかに入りこんで来ない世界、このごろ保育のなかに身を置いてなぜかこのことを考えるようになった。それは一つには保育以外の場所に身を置いているときに今「静寂」そのもののなかにいるときがどれほどあるだろうかと思ひ始めたからでもある。朝目覚めるとき、満ち足りた眠りのなかから自然に目を覚

まし床のなかで今日一日のことを静かに思いめぐらしてゆっくりと起床をする。そこには誰からも干渉されない眠りから覚めたときの喜びがある。ところが、こんなゆとりのある起床を保育者はしているのだろうか、少なくとも一度もない、という保育者が多いのではないだろうか、デリデリというけたゝましい目覚し時計に起され、ハッと飛び起きる。そしてもっとも早く！と考えてする支度、朝の静寂のなかで美しく太陽の輝やく戸外に目

をやる閑など到底ない。沸騰を知らせるのピーピーという音、テレビの時報、すべて忙しく追われる思いで食事もそこそこ家を出る。そして戸外には沢山の音、音が待ち受けている。駅のホームの呼び出し、注意事項、賑やかさを超えた騒々しさ、加えて駅員のアナウンスが次から次へと耳に入ってくる。乗車をすれば車内アナウンス、電車の走る音、軋む音、揺れる音、下車すれば、またアナウンスがつきつき耳に入ってくる。乗客に間違いないようコントロールを受けて川の流れのようにそれぞれの目的の場所に着く。

そこは自分の職場、子どもたちとの生活の場でもある。そこではまた静かなときをもって心のなかのスイッチを切り替える間もなく様々な呼びかけ、語りかけが保育者を再び喧騒のなかに置く。このようにして常に追いつたてられるようにして一日を騒々しいなかに過ごし、日々を繰り返しているうちに私たちのまわりから“静寂”というものがだんだん忘れ去られ遠く引き下ってしま

そして保育者は、その騒々しさの影を背負って子どもたちの前に立つ。

子どもたちは喧騒と管理体制のなかで絶えず忙しく動きまわっている保育者——その大人は静寂などというものが人間の世界にあったことさえ忘れ、また全く知らない大人もあって毎日の生活をしているそれが当り前になっている大人——と日々過ごす子どもたちはそのなかに一つの価値観を作りあげてしまっている保育者とともに数時間を過ごし、教えられ、指示され動かされている。

大人たちは、子どもというものは騒々しいもの賑やかなものとし自分が喧騒のなかで失ったものを子どもたちにも失わせつつあることを気付かないでいる。それでいながら騒ぎまわる子どもを自分の都合によっては無意識に押えつけていることもある。

このようななかで子どもたちに静かな何一つ聞こえない状態においてやることの難しさ！ 大人も子どもも静のなかに身を置くことが僅かになり喧騒のなかに自分があることの不感症に落ち入りつゝ、或は全く落ちてしま

って、二十世紀に向うのではないだろうかと思念してしまふ。保育者以外のこどもたちを取りまく世界もまた無神経な大人たちの騒音の渦のなかにある。そしてそれを逃れることはできない。逃れるということは社会生活を棄て人間としての積極的な責任をとらないということにもなる。

うるさい音のなかに始終ある人たちは年令を重ねると早く難聴を来たすという。医学的には理由があるとしても一つには耳が小さい音を聞かねばならないときが少なく耳が聴こうとする力を低下させてしまうのではないだろうか。保育の場でも大きな声で始終話しかけられたり、命令されたりしているこどもたちは、大きな声でないと聞かなくなってしまうことは事実だ。大きな声が保育者の声で小さな声は保育者の声ではないと思つてしまふようだ。小さい声をよく聴きわけれるこどもたちは今の保育の場から生れるのだろうか。軍隊の号令に等しい声だけしか声と思わないこどもたちが二十世紀には青年

になるとすれば恐ろしいことである。静寂を得るのに「静まれ」と大声でどならなければならない静寂を得ないのならそれは本当に彼らにとってすばらしいと思える静寂の一瞬ではないだろう。

一般的にはこどもたちを静かにさせるなんて！ 本当にかどもらしいこどもはそんなことはできないと思うのが常である。静かにすればその時はよいがそこで抑制された生の躍動は将来曲った型で出るということを誰もが思う。しかしこども自身が創り上げてゆく静寂、こども自身が自ら経験しての満足感のある静寂というものもあるのだということは考えられないだろうか。確かに慢性的状態になるような「静かにしましょう」の大声を浴びせかけられている状態、時を得ないで保育者側の都合や計画で静かにすることを要求した場合は前者のような結果を生み出すことになるだろう。しかし後者のような場合は、そのことによつてこどもたちの今置かれていた喧騒の時代から魂が揺り動かされその静寂のなかにその魂を休ませることによつて安定したときをよく多く持ち得

るように思う。それは平素気の付かなかった声や音を聞き分け知らなかった世界の発見を数々することが出来るときでもある。

過去の時代は余りこういうことに気を使ったり、心しなくても魂の休息を得るために静寂を、などとは思わなくてもよかった。こどもたちを遊ばせておいただけで静寂が彼らをつゝむ時はあった。園の内外もそして社会も静かな時を得ようとしなくても静寂がこどもたちをつゝむときはあった。どんな町なかであってもスピーカー付きでない物売りの声は遠くまで響き下駄の齒や靴音で人の気配を感じ、馬方が馬を追う鞭の音や馬の荒い呼吸も聞こえ、こどもたちは馬方と馬の労働や生活を静かにじっと知ることが出来た。鳥の声や風の音、木々の葉の触れあう音に春や秋を知った。それはテレビなどの情報としてでない本物の世界であった。また静寂のなかでの生物や植物の音や動きでこどもたちはいろいろな不思議の世界を捕えた。これは昔はよかった、昔だから出来た、昔のこどもはそれでよかったけど今のこどもには刺

激がもっと必要だ、ということだけで片付けられない人間の根元的な最初の魂の営みの一つであるように思えてならない。それは幼年期にその心の變のなかにいつまでも残しておかなければならない大切な原体験ではないだろうか。

聖書のなかに「汝ら、静まりて我の神たるを知れ」という言葉がある。人間を超えた尊厳に対して静かに頭を下げ、その至上命令を静寂のなかで謙遜に耳を傾けた人の心は現代の喧騒のなかにいる教育者にとってには至難の業であるが重要な人間の姿勢でもある。今は保育者のみでなく多くの人々が自ら入るもの、耳から大きく聞こえて大きく見えて、強い臭いや味でそのものズバリといった感じのものが人間の個体に飛び込んで打ちかってくるものでないと満足しない。殊にその中で見えないものに対する畏れや敬いなどが、それが如何に大切なものであるかと隅っこの方に追いやられてしまっているのを保育の場でも感じる。静は追いやられ動のみが幅をきかし、目に見えないものを遠くに追いやり見えるもののみを追

い求める。喧騒のなかにもある自分をハッと後ずさりさせて静のなかに身を置いてみると見えないものが見えてくる。自分の生命が見えてくる。大人もこどもも……。見えないものに対する畏れや敬いが見えてくる。自分が生かされている喜びや感謝が見えてくる。そして他者と共に生きていることが見えてくる。喧騒と自分を追い回している社会や職場の管理体制のなかで保育者はあくまで人間でありたい。そこからこどもたちとともに静かに聴く、考える、想うとき、祈るときが生れる。こどもたちは保育者が喧騒から逃れて静寂のときを探そうとその生活のなかで営みを始めるとこどももまたそのように生活を始める。静かに！と大声をあげなくても、保育者が、こどもたちの小さい声をよく聞いてやり耳を傾けようとしたとき、こどもは喧騒から解放されその保育者の声に耳を傾ける。美しい鳥の声を聞いたときに保育者が、その聞くときを与えてやれば、教えたり指示したりしなくても静かな時々こそ聞えてくるものがあることを体験する。これは保育の全体の姿勢そのものになって

くる。新しい世界に向ってこどもたちの胎動は始まる。今幼年期にあるこどもたちは青年期に入っている。その時青年の姿は外側だけのものであってはならないと思う。今よりも情報は激しく飛び交い今よりも広い宇宙に向けての志向は進むであろう。その青年が内なるものを豊かに持ったものになって欲しい。この地球に生を与えられ生活することを許されているものとして、静寂のなかに心を整え新しい未来を美しく築きあげることのできる人間であって欲しいと願わずにはいられない。これは喧騒のなかでも逞しく生き抜く処方箋でもある。そしてそのためにはまず今そのこどもたちに関わりを持っている保育者のなかでの静寂ということを真剣に私たち保育者自身の問題として問いつづけること、追い求めることが、そのことの始めとなるように思う。

(東洋英和幼稚園)